

# 地域まるごと学び舎に

少子高齢化や地域コミュニティの変化、デジタル技術の革新など、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化する中、教育の担い手も変わりつつある。今回の特集では、地域全体を「学び舎」とする東温市ならではの教育を伝える。



1 上林の「星の郷」の皆さんと炊き込みご飯作り（上林小）/2 則之内西の農家「和田丸」の皆さんとお米の勉強（西谷小）/3 河之内地区の大人と子どもでしめ縄作り（東谷小）

## 「教育」から「協育」へ 学校づくりは地域づくり

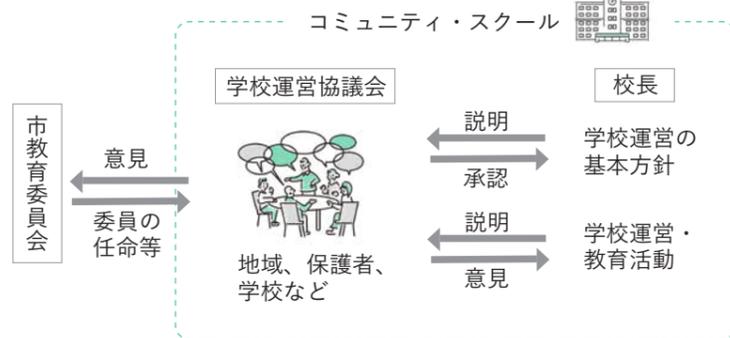
かつて、学校は地域コミュニティの中心であり、子どもたちは地域の大人に見守られながら育ってきた。しかし、核家族化や共働き世帯の増加、地域のつながりの希薄化などの社会構造の変化は、学校と地域の関係性にも影響を及ぼしてきた。先生たちの負担は増え、子どもたちの学習環境は多様化している。このような中、東温市では「地

域の子どもは、学校を含めた地域で育てる」という理念のもと「コミュニティ・スクール」を全ての学校に導入し、連携を進めている。地域住民が学校運営に加わることで、さまざまな効果が生まれる。地域の資源を活かした「その学校ならではの学び」を展開でき、子どもたちは教室の中だけでは得られない体験ができる。こうした活動は、地域に活力を生み、未来の地域の担い手を育てることもつながる。

東谷小学校では、地域の農家や老人クラブが一年を通して学校と深く関わり、子どもたちの学びを支えている。例えば、田植え、稲刈り、餅つきといった体験活動は、地域の大人たちが指導している。また、地域の大人と子どもが協力し、地域おこしのために20mの壮大なしめ縄を作り上げたことは記憶に新しい。子どもたちは地域の文化や歴史に触れ、愛着を育んでいる。

西谷小学校でも、地域の農家との田植えや稲刈りが行われている。特筆すべきは、単なる体験で終わらせないところ。子どもたちがお米に関する疑問を農家に直接質問する機会を作り、学びを深めている。

学校、保護者、地域住民などで構成され、学校運営を協議する「学校運営協議会」を設置する学校のこと。地域の声を取り入れながら、特色ある学校づくりを進める。



国が進める「部活動地域展開」。これまで教職員が担ってきた部活動の指導を、地域のスポーツクラブや文化団体、地域住民が立ち上げたクラブなどに委ねていく取組だ。

これにより、中学生世代がスポーツ、文化、芸術活動に親しむことができる機会を将来にわたって持続的に確保すること

後どうなっていくのかまだ誰も具体的に示せていない状態なので、仕方がないと思います。今後さまざまなきっかけで加入者が増えることはあると思いますし、まだまだこれからです」と、未来を見据えている。また、地域展開を進めるに当たっては「教職員も生徒も、放課後や休日の時間の使い方を選択して

## 部活動の地域展開がもたらす新たな可能性

や、教職員の業務負担を軽減し、本来の業務である授業や学級運営に集中できる環境の整備を目指している。

そんな中、市内出身で、現在川内中学校女子バレーボール部の顧問を務める渡部真平先生（写真左下）は、自らを指導者とする地域クラブを5月に立ち上げた。まだ加入者は数人にとどまっているものの、「部活動が今後どうなっていくのかまだ誰も具体的に示せていない状態なので、仕方がないと思います。今後さまざまなきっかけで加入者が増えることはあると思

いくことが大切だと思います」と強調した。

地域クラブに加入した生徒からは、「小学生の頃からバレーをしていて、部活動だけでなくもっとたくさん練習したいと思ってクラブに入りました。クラブでは、基礎からしっかりと指導してもらっています」と、専門的な指導を受けられることを喜ぶ声が聞かれる。



## 「教育」から「共育」へ 学校教育にも変化の波が

「は〜い。じゃあタブレット出して〜」。拝志小学校4年生の教室で、先生が呼びかける。この日の授業テーマは「暑中見舞いを作ろう」だ。

かつては、配られたはがきの裏にイラストや暑中見舞いの言葉を手書きしていたが、今では、子どもたち一人ひとりに配られたタブレット端末を

使ってお見舞いの言葉をタイピングし、好きなイラストを素材から選ぶ姿に変わった。他にも算数の図形学習やプログラミング授業などで使われており、教室には鉛筆が走る音に加え、キーボードを打つ音が広がるようになった。また、グループワークも積極的に取り入れられるようになり、子

どもたちが主体的に学ぶ姿勢を育んでいる。

体育の授業にも大きな変化が。市内一部の学校では、今年度から水泳の授業を「フィッタ重信」に委託。学校プールの維持管理が不要となり、天候に左右されることなく授業が行えるようになった。さらに、フィッタ重信の専門スタッフから指

導を受けられるため、一人ひとりのレベルに合わせたきめ細やかな指導も可能に。社会の変化や学校、教職員を取り巻く環境に対応しながら、子どもたちの豊かな学びの場を守るため、学校教育の現場は着実に進化を遂げている。そして今、変化の波は放課後の部活動にも及び始めている。



1\_一人一台タブレットを使って授業/2\_グループワークで意見を出し合う/3\_慣れた手つきでタブレットを操作/4\_民間委託が始まった水泳の授業/5\_フィッタ重信へバスで移動/6\_スタッフが一人ひとりを指導。先生はプールサイドから緊急時に備える



「わんぱく広場」でウォーターサバゲー



協働活動サポーターが「わんぱく広場」をサポート



「放課後わくわく教室」でペットボトルロケット作り

## 「子どもと関わりたい」 教育の担い手は地域にも



和田裕介さん  
(47歳・南方面)

**profile** 学校・家庭・地域連携運営委員会の副委員長。高齢者福祉の仕事しながら、学校運営に携わる。4児の父。好きな食べ物は妻の作った生姜焼き。

コミュニティ・スクール制度を支える重要な柱の一つが、「学校・家庭・地域連携推進事業」だ。この事業は、学校と地域がパートナーとして子どもたちを育てていくための取組で、学校と地域が連携して協働活動や体験活動を行う「地域学校協働活動」や、学校と地域をつなぐ「地域コーディネーター」の配置、放課後や休日における子どもたち

市全体で取組を推進できる仕組みが必要ですね。地域の子どものために何かしたいという思いを持つ人と、地域の手を借りたい教育現場とのマッチングには、更なる工夫が必要かもしれない。和田さんは自身の経験も踏まえ、「普段、小さなコミュニティで生活している子どもたちにとっては、地域の大人と出会うこと自体が良い経験。その中で『地域にこんな人がいるんだ』と知ることから郷土愛も生まれると信じています」と強調する。子どもたちを育てるのは、家族だけでなく、先生だけでもない。地域に暮らす全ての人が、地域という大きな枠組みの中で子どもたちを育てていく。これが、市が目指す「協育」、「共育」の姿ではないだろうか。

の居場所づくりとして「放課後わくわく教室」、「わんぱく広場」、「ジュニア体験塾」、子どもたちの学習習慣の定着を支援する「地域未来塾」を行っている。そして、このような事業を支援するのが、「協働活動サポーター」と呼ばれる地域住民だ。

取組を推進する「学校・家庭・地域連携運営委員会」で副委員長を務めているのが、和田裕介さん(写真左上)。和田さんは、川内中学校PTA会長や川内小学校と川内中学校の学校運営協議会委員、そして協働活動サポーターとしても熱心に活動しており、その原動力は、幼少期の経験にあると言う。「幼い頃、近所の人や子ども会でさまざまなことをしてくれたのが良い経験になっていて、次は自分が地元の子どもたちに何かして

あげたい思いがあります。さまざまな角度から子どもたちに関わる和田さん。川内小学校の授業では、アフロをかぶって「川上博士」の名札をつけ、老人会の人と一緒に川上地区の歴史を紹介したこともあり、すっかり子どもたちの人気者だ。

和田さんは、協働活動サポーターの重要性を強く感じている。「実は地域には『学校と連携して子どもたちと関わってほしい』と言われる人が大勢います。地域の人が入ってきてくれると、学校だけでは知り得ないことを知ることができ、教育に幅が生まれます。先生たちの助けにもなります。ただ、協働活動サポーターの活用状況は、学校によって少し差があるのも現状です。学校間で、先行事例を共有するなど、

コミュニティ・スクール制度の導入、地域住民の参画、そして部活動の地域展開……。子どもたちの豊かな学びの場を守り、地域への愛を育むために、地域に住む私たちと学校とのパートナーシップを大事にしたい。学校は、絶えず進化していく。学び舎を地域へ広げながら。



### 子どもたちの学びを支える 協働活動サポーター

☎生涯学習課 ☎ 964-1500

学校での活動を始め、放課後や休日の活動を支援する。学生から高齢者まで約150人が登録し、特技を活かして活動している。  
◇活動内容…登下校の見守り、本の読み聞かせ、図書の整理、音楽・手芸活動、花壇

の整備、簡単な学校設備の修繕、放課後わくわく教室・わんぱく広場・ジュニア体験塾の支援等  
◇登録方法…「協働活動サポーター登録書」を記入し、学校又は生涯学習課に提出

詳しくは市HPへ

